# まちかね山吹奏楽団

## 第15回定期演奏会

## 特集！ 酒井先生 & 川合先生 インタビュー with 小野川先生

日時：2017年2月19日㈰
ゲスト：酒井格氏、川合清裕氏、小野川昭博氏

まちかね山吹奏楽団第15回定期演奏会のゲストとしてお招きしたのは、「たなばた」「大仏と鹿」をはじめ数々の名曲を発表されている酒井格先生と、2017年度全日本吹奏楽コンクール課題曲「メタモルフォーゼ～吹奏楽のために～」の作曲者でもある川合清裕先生、そして毎年お世話になっている指揮者の小野川昭博先生です。
この日まちかね山吹奏楽団の合宿にレッスンにお越しくださった先生方に、お話を伺いました。

（文中、敬称略）

### ☆ チャイコフスキーのスコアをひたすら眺めていた小学生時代。

**―― 酒井先生が音楽に関わられたのはいつ頃からでしょうか？**

**酒井**：小さいころにピアノを習っていました。作曲もその頃からです、5歳か6歳ぐらいですかね。

**―― 5歳か6歳ぐらいでピアノを弾いて曲を作っちゃうっていうことですか？**

**酒井**：そうですね、小さい頃はピアノの曲しかなかったんですけどね。

きっかけのひとつとしては、昔は家にLPというのがあってですね、チャイコフスキーのピアノ三重奏曲のLPにスコア（総譜）がついていたんです。それをスコア見ながら曲を聴いていたんです。すると、必ず第二楽章の途中で落ちるんですよ。

で、やっと分かったのですが、曲が途中でカットされてたんです。（笑）

**小野川**：〝落ちる〟って？〝見失う〟ということだよね？「あれ、おかしいなあ？」って思いながら聴いていたの？

**酒井**：落ちると悔しいから（笑）、もう一回最初から曲を聴き始めるんだけど、さすがに1日1回までにしなさい、と親から言われていました。

毎日、今日こそは最後まで分かってやるぞ！という気持ちで。小学2年生ぐらいの時から、そんな子どもでした。

（一同、驚愕）

**酒井**：とにかく、チャイコフスキーのピアノ三重奏曲は結構聴きましたね。他にオーケストラや室内楽の楽譜に興味はありましたが、家にはありませんでした。

後に、町の楽譜屋に行ったら色んな楽譜が買えるということを知った時から、その後がもう大変でした（笑）

**―― もともとはご家族が音楽をお好きだった影響なのでしょうか？**

**酒井**：母親が歌をやっていました。日本グラモフォンに友達がいたから、試聴用の盤が結構あったんですよ。それで、そのチャイコフスキーのLPが家にありました。

スコア付きのLPは昔は結構あったらしいんですよ。

**―― やがてご自分で楽譜を買いに？**

**酒井**：そうですね。もう小遣いもらったらすぐに楽譜に消えて。

**川合**：素晴らしい。すごい。

**酒井**：まあね。あまりいいことかどうか（笑）。今になって思えば、昔の方が勉強熱心でした。ただし、学校の勉強はあまり好きじゃなかった。

**―― 吹奏楽と出会われるのは、もう少し後ですか？**

**酒井**：小学4年生の時に吹奏楽と一度出会ってるんですよ。当時の大阪市音楽団の「たそがれコンサート」で、ヴィヴァルディの「四季」を指揮しました。

**小野川**：指揮者体験コーナーかな？

**酒井**：そうです。それも、その当日舞台に飛び入りっていう企画ではなかった。

4月ごろに新聞に募集が載って、親がたまたま「ちょっとこれやってみない？」みたいな感じで応募して。夏の時期のコンサートでしたが「春」の第一楽章を…。♪チャン、チャンチャンチャン、チャカチャ～ン。そしたら調性が（原曲と違って）Eb durなのかな？」とか思いながら指揮しました。

そうそうそう、後に吹奏楽の演奏だからフラット系が良かった、とわかったんですけどね。

当時、市音は天王寺に練習場があって、毎週練習に通って永野（慶作）先生に身振り手振りで教えてもらっていました。そうしているうちに、ホルンを持った楽団員のおじさんが、『おっ！マエストロ、おはようございます。』『こんばんは。』『違うよ、おじさんたちの挨拶はいつでも〝おはよう〟なの！』とか言って（笑）

**小野川**：たそがれコンサート前。夕方ね。

**酒井**：吹奏楽との出会いは、実はそれが最初なんです。ただあんまり吹奏楽と言われてもよく分かっていなくて、オーケ